

《優秀賞》

「戒石銘から学ぶこと」 二本松第一中学校 一年 齋藤 凜恋

一七四九年（寛延二年）三月、霞ヶ城の東手に露出していた、長さ約八・五メートル、最大幅約五メートルの花崗岩に四句十六字の教えが刻まれた。その教えは、約二百七十年を経ても今なお、大切に受け継がれている。

戒石銘は、二本松藩五代藩主である丹羽高寛が、藩士の戒めのために刻ませたものだ。名家出身の丹羽様であったが、当時の二本松藩は、とても苦しい財政状態だったと聞く。そんな時、丹羽様が、「あなた方武士の給料は、民が汗を流して苦勞したものから出ている。自分より下のものをいじめるのは簡単だが、天はあなた方を見ているのでだますことは出来ない。」という教えを刻ませた。藩を支える下民に感謝の気持ちを持ち、武士としての誇りと謙虚さを常に心に刻み続けるよう伝えたかったに違いない。

私の故郷、二本松には、戊辰戦争で新政府軍と戦った、二本松少年隊の勇敢さと悲劇が根付いており、私も小学校で三年間剣舞を舞い、少年隊士の思いに少しだけ触れることができた。私と大して歳の変わらない若者たちが、なぜ敵を恐れず、勇猛果敢に立ち向かう

ことができたのか、一年前の私には見当がつかなかった。しかし、改めて戒石銘について学んだ今、私なりに答えにたどり着いた気がした。少年隊士とは言え、武士であることに変わりはない。武士には、二本松藩とその民を守る使命があると信じていたのではないか。だからこそ、不安や恐怖を断ち切り、敵を撃退しようとして出陣したのではないかと。二本松少年隊の気高さに感激すると同時に、私には真逆の思いがよぎった。もし、戒石銘がなければ、少年隊たちは命を落とさずに済んだのではないのか。戒石銘が現代にも残る尊い教えであることは間違いないが、私は少し複雑な気持ちになった。

改めて、戒石銘は私たちに何を伝えたいのだろう。それは、「他人を思う気持ち」であり、「自分の心に正直に生きる」ということではないだろうか。

SNSを使えば、指一本で世界中の人々に無責任に情報を発信できる世の中である。人を誹謗中傷する言葉が飛び交い、それが原因で人が自ら命を絶つという、悲しいニュースが後を絶たない。誰にでも自分の考えを発信する権利はある。だからこそ、その先にいる誰かが間違いなく血の通った人間であり、その人にも人生、人格があることに気付いてほしいと思う。お互いが少しずつ『他人を思う気持ち』を持つことができれば、世の中の悲しい出来事は確実に減っていくだろう。

また私は、戒石銘にある「天」を「自分」に置き換えて考えてみ

ることにした。自分で自分をだますことは出来ない。また、一時的に人を偽ることができたとしても、悪い行いは、巡り巡って必ず自分に返ってくる。私は良い人でいたいと心から思う。しかし、言葉で言うのは簡単だが、私はそんなに強い人間ではないし、なれる自信もない。せめて、自分の心に正直に生きることができたら、理想とする良い人に近づけるのではないか。みんなでそんな思いを共有できたら、もっともっと楽しい世界が広がっていくのではないか。戒石銘は、大切なものを失いかけているこの世界を変える、大きな手がかりを示してくれているような気がした。

私は、この戒石銘を通して、人と人との心の繋がりを大切にしたいと強く感じた。周りの人と本音を語り合い、その人たちの存在に感謝しながら、自分の人生をしっかりと歩んでいきたいと思うようになった。二本松で生まれ育ったことを誇りとして、自分探しの旅を続けていきたい。